

## 研究ノート：学校放送「ワンツー・どん」にみる 「遊び」：小学校音楽科学習指導要領との関連性

佐藤，慶治  
鹿児島女子短期大学児童教育学科音楽教育学専攻：専任講師

<https://doi.org/10.15017/4776875>

---

出版情報：総合文化学論輯. 15, pp.85-92, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

# 研究ノート：学校放送「ワンツー・どん」にみる「遊び」 —小学校音楽科学習指導要領との関連性—

佐藤 慶治

## 1. 本研究ノートの目的と導入

本研究ノートでは、1974年4月から1996年3月までNHK教育テレビで放送されていた小学校1年生向け音楽科の学校放送番組「ワンツー・どん」をテーマとし、その中でみられる「遊び」の意図と意義について、当時の学習指導要領との関連性も含めて論じたい。

科研費(基盤B)課題「小学校音楽科における教育番組・児童番組の利用に関する総合的研究」では、小学校音楽科を対象とするNHKの学校放送を中心的な研究課題とし、1955～2006年まで断続的にテレビ放送されてきた番組群について、それぞれの時期における学習指導要領との関連性の分析、小学校授業での利用に関する調査、制作側における関連資料の分析等を行っている。その番組群は以下の通りである。

- ・小学校1-2年生対象

「うたいましょう ききましょう」(1955-74年), 「ワンツー・どん」(1974-96年), 「うたって・ゴー」(1974-96年), 「まちかどド・レ・ミ」(1996-2003年), 「ドレミノテレビ」(2003-06年)

- ・小学校3-4年生対象

「音楽あそび」(1957-59年), 「たのしい教室」(1959-62年), 「みんなの音楽」(1962-74年), 「ふえはうたう」(1974-97年), 「ゆかいなコンサート」(1986-95年), 「トゥトゥアンサンブル」(1997-2000年), 「歌えリコーダー」(2000-03年)

- ・小学校5-6年生対象

「音楽教室」(1954-74年)

※現在は、「おんがくブラボー」(2015～、小学校3-6年生対象)のみ放送されている。

研究テーマであるこれらの小学校音楽科を対象とする学校放送番組については、2008年に東京芸術大学音楽学部音楽教育研究室刊行の『音楽教育研究ジャーナル(29)』において(濱野政雄と学校放送)という特集が組まれており、また音楽教育学者の檜下達也による「1970年代・学校放送音楽教育番組への『ポピュラー音楽のリズム』の導入—ポピュラー音楽と子どもたちをめぐる議論に着目して—」等、これまで複数の論文が執筆されている。ただし、制作側の資料を使用して個別の学校放送番組について深く掘り下げる研究や、実際の番組利用の調査を行った研究は非常に少なく、また研究の傾向としてテレビ番組よりラジオ番組に比重が置かれてきた。これについては、テレビ番組としての学校放送に関す

る資料入手の困難さも一要因であると考えられる。

上記の檜下論文においては、「ワンツー・どん」が中心テーマとして扱われ、「ポピュラー音楽のリズム」が学校放送や小学校音楽科に導入された過程が論じられている。本研究ノートにおいては、それとは異なる「遊び」というキーワードを基に番組を分析し、その意図や学校教育における意義まで論じたい。

## 2. 「ワンツー・どん」と「遊び」

「ワンツー・どん」は1974年4月からの開始である。1973年度まで小学校向けの音楽科学校放送は、低学年向けの「うたいましょうききましよう」、中学年向けの「みんなの音楽」、高学年向けの「音楽教室」が放送されていたが、1974年度より、対象を小学校1-3年生に集約し、各学年1本の音楽番組に組み替えることとなった。そこで1年生向けの「ワンツー・どん」、2年生向けの「うたって・ゴー」、3年生向けの「ふえはうたう」が一斉にスタートした。

当時、NHKでプロデューサーを務めていた後藤田純生が「ワンツー・どん」の制作を担当したのは1979年から1983年にかけての時期である[後藤田1985]。後藤田は1961-68年、1971-74年に「みんなのうた」の制作を担当していたことでも知られるが、「ワンツー・どん」と「みんなのうた」との共通点としては、東京放送児童合唱団を主とする児童合唱団、すなわち子どもが演奏の主体となって番組が制作されるということがある。また、「ワンツー・どん」は番組の中で積極的にポピュラー音楽のリズムを導入していたという特徴があるが[檜下2013]、そもそも戦後日本の「こどものうた」の世界にポピュラー音楽の要素を導入した先駆コンテンツは、後藤田担当時期の「みんなのうた」であった[佐藤2018]。

ここで、後藤田担当時期の「ワンツー・どん」における一年間の番組副題を見てみたい。NHKクロニクルで検索した1981年度の番組副題一覧を表でまとめ、以下に記載する(水曜日の初回放送のみ、休止日は記載しない)。

1981年度	副題	5月27日	うたのおいかけっこ 1	7月8日	おたよりひろば
4月8日	ワンツーどん	6月3日	たのしいハーモニカ	9月2日	みんなでうたおう
4月22日	はるのうた	6月10日	リズムにあわせて 1	9月16日	まねあそび 1
5月6日	大きなくりの木の下で	6月17日	あめふり	9月30日	リズムであそぼう 3
5月13日	じゃんけんあそび	6月24日	リズムであそぼう 2	10月7日	うかれもつきん
5月20日	リズムであそぼう 1	7月1日	ケンパあそび	10月14日	まつりだわっしょい

10月21日	手あわせうた	12月2日	リズムにあわせて 2	2月3日	ふゆのうた
10月28日	あきのうた	12月9日	たきび	2月10日	リズムにあわせて 3
11月4日	リズムであそぼう 4	12月16日	おたよりひろば	2月17日	ピアノはうたう
11月11日	まねあそび 2	1月13日	みんなであたおう	2月24日	ごんべさんのあかちゃん
11月18日	森のくまさん	1月20日	うたのおいかげっこ 2	3月3日	リズムであそぼう 5
11月25日	ラッパはひびく	1月27日	ドレミのうた	3月10日	おたよりひろば

この年度の副題を見てみると、「あそび」「あそぼう」など、遊びに関する副題が目につく。同番組における「遊び」について、番組内に取り入れる経緯についての後藤田による述懐が存在するため、以下に引用掲載したい。

番組にもこの「身体表現」の学習を目標としたコーナーを設けることになったのである。私がこの時に思いついたのが、テレビのタレントの動作をそっくり模倣している子どもたちの姿である。テレビ出演者の呼びかけで、視聴児童に身体的な活動を模倣させ、「身体表現」の学習のきっかけを作ったらどうかというアイデアであった。そして、その「身体表現」の活動は単に動くことだけを目的とするものではなく、児童たちに「遊び」の一部として受け入れさせてはどうかという考え方も加えてみたいと思ったのである。この企画は実現することになった。基礎的なスタディが重ねられ、また実験的なワークショップがもたれた。そして日本ではあまり重視されていなかったアクションソング、シンギングゲームのすぐれた素材を作り、これを中心に「リズムコーナー」、「遊び歌コーナー」の二つのセグメントを制作することになった[中略]小学校の音楽学習においてもポルカやワルツなどというダイナミックなビートが出てくる。こうした学習を容易にするのにもっとも効果的なのが、「身体表現」である[中略]一般の児童たちは頼もしかった。一部の先生たちの反応とは別に、これらの番組の内容をわれわれの意図通りに受け止め、教室外、学校外の場で、自発的な“遊び”として自分たちのものになっているのである。  
[後藤田 1985]

すなわち、この番組においては「身体表現」や「リズム」が「遊び」として捉えられたということが後藤田によって語られている。また、一部の教員からは戸惑いの声があったものの、児童たちにはこの取り組みが好意的に受け止められたという事情も読み取ることができる。「遊び」については、同番組の音楽指導・監修的な役割を果たしていた音楽教育学者の繁下和雄も、同番組テキスト序文において以下のように述べている。

日本数学教育学会の調査によると、小学生が最も嫌う教科は「音楽」だという[中略]教科として学ぶ音楽、いや学ばされる音楽という受身なところに音楽がおかれ、しかもその内容が音符の読み書き中心となればなおさらのこと[中略]楽器をひくことを play というように、英語でも独語でも仏語でも、「ひく」と「あそぶ」は同じ語です。日本語でもかつては「管弦にあそぶ」といういい方がされていました。play する余裕が音楽を作っていたともいえましょう。それをとりもどすことから音楽教育をはじめてみませんか。そのためには、教師も生徒も一緒になって歌い踊り、自己を表現し、共感しあい、打ちあうことという「歌う」の原点に近づこうではありませんか。そのための一つのアンサンブルが「ワンツー・どん」なのです。[繁下 1981]

ここからは、「ワンツー・どん」において「遊び」が重視される明確な理由を読み取ることができる。すなわちこの文章が書かれた当時(1980 年度)、小学生の音楽離れが音楽教育界で問題となっていたということだ。その打開策として「遊び」がクローズアップされたのである。この繁下の文章が書かれた年度は、新学習指導要領施行の年度でもあった。次の章では、この新学習指導要領とその前の版の学習指導要領の比較分析を行いたい。

### 3. 学習指導要領の比較と小学校音楽科に対する後藤田の見解

まず、それぞれの版の小学校音楽科学習指導要領における第 1 学年の目標を引用掲載したい。

#### 1 目 標 (1971 年度施行)

- (1) 鑑賞，歌唱，器楽，創作などの活動を通して，音楽的感覚の芽ばえをのばす。
- (2) 音楽を楽しく聞こうとする意欲を育てるとともに，聞いたり演奏したりすることを通して，いろいろな楽器の音色や音楽の種類，演奏形態について興味と関心をもたせる。
- (3) 歌ったり楽器を演奏したりする楽しさを味わわせ，創造的に表現しようとする気持ちを育てるとともに，歌唱および器楽の基礎的技能を養う。
- (4) 即興的に音楽表現しようとする意欲を育てるとともに，そのための基礎的技能を養う。
- (5) 音楽に対する愛好心を育てるとともに，愛好曲を身につけさせ，明るく楽しい生活ができるようにする。

#### 1 目 標 (1980 年度施行)

- (1) 音楽の美しさを感じ取らせるとともに、音楽についての興味や関心をもたせる。
- (2) リズムの聴取や表現に重点を置いて、表現及び鑑賞の能力を養う。
- (3) 音楽経験を生かして、生活を明るく楽しいものにする態度と習慣を育てる。

どちらも第1学年の目標ではあるが、1971年度施行版の目標については、「器楽の基礎的技能を養う」や「即興的に音楽表現する基礎的技能を養う」、「音楽を楽しく聞こうとする意欲を育てる」など、児童に意欲や技能を身につけさせるという内容が読み取れる。それに対し1980年度施行版では、「興味・関心」や「態度・習慣」の育成ということが主目的になっており、さらには表現についても「リズム」や「聴取」が中心項目となった。

また「2内容」については、1971年度施行版の方は「基礎」「鑑賞」「歌唱」「器楽」「創作」という五つの項目が存在するのに対し、1980年度施行版では「表現」と「鑑賞」の二つにまとめられている。以下に1980年度施行版「第1学年」の「A表現」項目のうち、「(1)表現の能力に関して、次の事項を指導する」の部分引用掲載したい。

#### A 表現

ア 範唱や範奏を聴いて歌うこと。

イ リズムフレーズの拍の流れを感じ取って、演奏したり、身体表現をしたりすること。

ウ 曲想を感じ取り、また、歌詞の表す情景を想像して表現すること。

エ 自分の歌声を聴きながら歌うこと。

オ ハーモニカ及び打楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を工夫して表現すること。

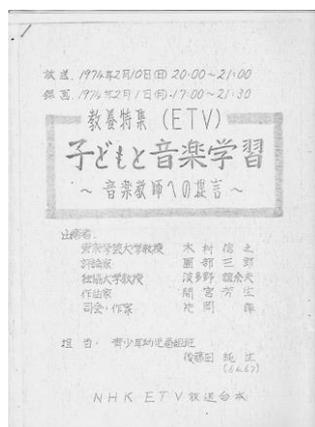
カ リズム遊びやふし遊びをし、即興的にリズムや旋律を工夫して表現すること。

キ 伴奏の響きを聴いて歌うこと。また、互いに歌声や楽器の音を聴き合って演奏すること

上記イではリズムフレーズと身体表現が結び付けられており、またカでは「リズム遊びやふし遊び」という「遊び」の内容が明示される。これに対し、1971年度施行版では「C歌唱」の部分に「イ自由な身体表現をしながら歌うこと」という項目はあるが、「遊び」というキーワードは全く見ることができない。次に、それぞれの時期の小学校音楽科に関して、後藤田による評価を見てみたい。

まず、後藤田の遺した資料より発掘された「子どもと音楽学習～音楽教師への提言～」(1974/2/10)という番組の台本が存在する(図1)。後藤田が制作担当を務めた番組であり、研究者等による小学校音楽科についての討論番組だが、後藤田からの触れてほしいポイントとして、「学校音楽教育で音楽嫌いが作り出されていることに疑問が残る」「小学校低学年の入門期が重要」「他の学科と同じ知的学習の形をとっているのではないか」「心と身体で

体験してこそ楽しい音楽が歌唱、楽器などの方に傾いている」「楽しい、自由に、創造的ということは、同時に遊びの側面を持つことではないか」ということが記載されている。



(図1、台本の表紙)

上記より、1971年度施行版学習指導要領下で行われていた音楽科教育について、後藤田は多くの問題を感じていたことがわかる。これを読む限り、1980年度施行版学習指導要領への移行は、後藤田にとって望ましい変更であったということが言えるだろう。また、1980年度施行版に切り替わった後の後藤田の文章についても以下に引用掲載したい。

先日も、音楽教育の専門家と、「音楽学習」の中での「遊び」について、議論をしたことがある。それは、その専門家が、最近の傾向として、教室内の「音楽学習」に「遊び」を持ち込みすぎる結果、音楽の学習が不十分となっていることを指摘したのに対し、私は、「音楽学習」がいかなる場合でも「遊び」の本質を失わない状態の中で行われるべきであると反論した[中略]とくに低学年の「音楽学習」は、文字で書かれた指導計画を達成させるだけのために行われるものではない。子どもたちが人間として成長していく中で、「音楽」を自己表現の手段として身につけ、子どもたちが自主的に獲得するであろう精神的な喜びとするためには、どうしても「学習」が「遊び」の雰囲気の中で行われることになる。そして、さらに「音楽学習」が教室の中だけで完結するのではなく、それは子どもたちの生活の中で発展した時、はじめて「音楽学習」が子どもたちの手によって行われたことになるのではないかと[中略]すでに『ワンツー・どん』の《かもつれっしゃ》や《魔女のスキップ》、それから『うたってゴー』の《町からきたあの子》などが、テレビ視聴後の教室から飛び出して、校庭の遊びの時間で行われたり、全校集会などの他学年の子どもたちとによる集団遊びに活用されているなどの報告は、私たちの提案が、子どもたちの世界に広がりつつある証拠として受け取っていいのではないかと思う。

[後藤田 1982]

1980 年度に新学習指導要領が施行されて以降、それ以前とは逆に、「教室内の音楽学習に遊びを持ち込みすぎる結果、音楽の学習が不十分となっている」ことが専門家によって問題視されたが、後藤田は(特に低学年の場合、)あくまで「遊び」の中で音楽学習を行うことが重要と考えていたことが読み取れる。また「ワンツー・どん」は、兄弟番組の「うたって・ゴー」と一緒に、子どもたちの世界に浸透していったということだ。

#### 4. 小学校での実践、まとめ

本研究ノートの最後に、当時、小学校で実際に行われた「ワンツー・どん」の視聴教育についてまとめたい。1982 年 12 月の『放送教育』特集において、岡崎市立広幡小学校の鈴木知恵教諭が、「ワンツー・どんを継続視聴して得たもの」として、以下の内容を挙げている。実践自体は 1981 年度を通じて行われたものということである。

- ・1 年生の週 2 時間のうちの 1 時間にテレビ視聴を取り入れた。教師は、歌う時にはテレビの出演者と一緒に歌い、体を動かす。リズム遊びになると一緒に踊ったりした。それをまねて、子どもたちも自然に、テレビのお兄さんやお姉さんといっしょに口を揃えて歌うようになった。
- ・リズム遊びを楽しんでいた子どもたちも時を重ねるうち、何の指示をしなくても、ごく自然に体を動かし、場所が狭くなると広い所へ移動して、ある子は一人で、ある子は友だちと手をつないで歌を歌ったり、リズム遊びをするようになった。
- ・歌唱指導においても、長く継続視聴してくると、目に見えて力をつけるように思われる。[中略]テレビが終わるとすぐ「歌おう」とすかさず、さも当たり前のように言った。数回オルガンをひくうち、すっかり歌えるようになってしまった。[中略]何の抵抗もなく歌いたいように歌う姿が、自然に育ちつつあるように思われた。
- ・これらの授業で育った力を発揮し、より広い表現力を生み出していこうという考えのもとに、学習発表会に音楽劇を扱った[中略]セリフをしゃべりながら、手足や体を動かしたり、歌いながら体を動かすということに反発を感じるかもしれないと少々心配していたが、そのような姿はまるでなく、困ったなあといえば困った顔をし、うまかったといえば、口をなめて手でこするし、自然に動作ができた。このような力をもし、週 2 時間私の授業だけでつけようとしたら、どのような授業を組まなければならないか、計画すら立てられない。[鈴木 1982]

これを見るに、後藤田担当の「ワンツー・どん」で実践された「遊び」の試みは、実際

の音楽科授業内でも有効に働いたようだ。「遊び」の意義について後藤田は、「子どもたちが人間として成長していく中で、『音楽』を自己表現の手段として身につけ、子どもたちが自主的に獲得するであろう精神的な喜びとするためには、どうしても『学習』が『遊び』の雰囲気の中で行われることになる」としているが、その目論見通り、子どもたちは「何の抵抗もなく歌いたいように歌う姿」を自然に育てていったことがわかる。

以上、本研究ノートにおいては学校放送番組「ワンツー・どん」をテーマとし、その中でみられる「遊び」の意図と意義について考察を行った。後藤田等、当時の制作者が大変、意図的に番組内に「遊び」を組み込んでいたということが結論として言える。また、それは当時の小学校音楽科学習指導要領とも合致することであった。

本研究ノートでは、主に同番組の理念的な部分の分析を行った。今後の課題として、番組内で実際どのように「遊び」の実践が行われていたかということの分析を行いたい。

## 引用・参考文献

- ・石川昌/東龍男/繁下和雄編『NHK ワンツー・どん 歌あそびリズムあそび』(音楽之友社、1981)
- ・日本放送協会編『ワンツー・どん リズムあそび うたあそび』(日本放送出版協会、1983)
- ・後藤田純生「テレビ学校放送の音楽教育における役割」『放送教育 1982/12』(日本放送教育協会、1982) pp. 16-19.
- ・鈴木千恵「ワンツー・どんを継続視聴して得たもの」『放送教育 1982/12』(日本放送教育協会、1982) pp. 20-23.
- ・後藤田純生「音楽番組とその評価」『HBF 助成・援助プロジェクトからの報告 秋の号 No.29』(放送文化基金、1985) pp.26-29
- ・樫下達也「1970年代・学校放送音楽教育番組への「ポピュラー音楽のリズム」の導入：ポピュラー音楽と子どもたちをめぐる議論に着目して」『関西楽理研究第30号』(関西楽理研究会、2013) pp. 73-82.
- ・佐藤慶治「1960-70年代における NHK『みんなのうた』と西洋ポピュラー音楽」『比較文化研究 133号』(日本比較文化学会、2018) pp. 103-115.

[‘Play’ in the School Broadcast Program “One-Two-Don” : Relevance to Primary School Music Curriculum Guidelines]

[SATO, Keiji・鹿児島女子短期大学児童教育学科専任講師・音楽教育学専攻]

[現在の研究テーマ：戦後日本の音楽教育とメディア]